

研究ノート

英語学習ホントのところ

表象文化 Café ランチタイムセッションから

¹高橋 幸平 ²若本 夏美¹同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・准教授²同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

Myths and Truths About Learning English:

From the Lunchtime Session of the Culture and Representation Café

¹TAKAHASHI Kohei²WAKAMOTO Natsumi¹Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor²Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

1. はじめに

表象文化学部では、2021年度より「表象文化 Café」と題したイベントを不定期に開催している。これは、英語英文学科および日本語日本文学科に所属する教員が、単独あるいは複数で、自らの研究分野に関わるテーマを一つ設定しプレゼンテーションを行うものである。イベントは原則としてランチタイムに楽真館ラーニングコモンズ・イベントエリアで、教職員や学生が昼食をとりながら、参加・退出自由のリラックスした雰囲気で行われている。プレゼンテーションは短時間（20分間、12:40-13:00）であり、アカデミックな内容を専門外の者でも興味を湧くような形で楽しく提供することを一つの方針としている。

表象文化学部がさらに活気に満ちた学部であるためには、学科間の壁はなるべく取り除き、

両学科が一体となって学部全体の魅力を創成・共有・発信することが望ましい。そのためには、研究内外における教員間の交流・相互理解が有益だと思われるが、近年、表象文化学部には新任教員が増加していること、また年々各教員の業務が増加していることもあり、現状ではそのような交流や相互理解が自然に発生することは期待できない。そこで、教員の研究上の交流と相互理解を第一の目的に、そして学生が表象文化にまつわるさまざまなトピックに関心を持つことを第二の目的に、上のような企画が構想された。素案は2021年度春学期の早い段階で作成されたが、イベントそのものが教員の負担にならぬよう、同時に学生を巻き込んだ効果的な形を実現できるよう、継続的な議論と周到な準備がなされ、満を持して2021年11月に第1回目の会が開催された¹⁾。

本研究ノートはその一例として、高橋と若本

とで行った「第4回表象文化 Café」（2022年1月14日）の内容を紹介するものである²⁾。

2. トピック設定の背景

「英語学習ホントのところ 若本先生に聞きたいこと」と題して行われたこの会は、高橋からの言語習得に関わる様々な質問に対して、若本が専門的な観点から解説を加えながら回答するという形式を採った。企画の趣旨の一つは、表象文化に関わる多様な学問領域へ学生の関心を向かせることであり、したがって、質問には、言語習得について多くの人が一度は抱いたことがあるような素朴な疑問、または巷説・俗説を中心に取り上げ、回答もなるべく日常的な言葉を用いることにした。

ところで、このトピックを高橋・若本が設定したことには次のような背景がある。

2009年4月、英語英文学科と日本語日文学科は京田辺から今出川へキャンパスを移転した。それまでは学芸学部5学科を構成する2学科という位置づけであったが、この2つの学科で新たに表象文化学部として再スタートすることとなった。これを機に両学科のコラボレーションを目指し、いくつかの構想が提案された。たとえば、研究室を学科毎に配置するのではなく、分野毎に再構成してそれぞれにセンターという名称を付ける案（例、文学研究センター、文化研究センター、言語教育センター）は未だ実現に至っていないが、両学科が入れ子になって副専攻制度を設ける案は丸山敬介教授、今井由美子教授、山本由紀子准教授の尽力により、2009年からスタートして今日に至っている³⁾。これは学科ごとの縦割り構造を固定化させない取り組みの一つだが、今回の「Café」の源泉のひとつは、表象文化学部のこのような潮流にある。

もうひとつの源泉は高橋と若本の在外研究にある。高橋は2020年度にアメリカ・ワシントン大学で、若本は2000年度にカナダ・トロント大学、2018年度にイギリス・オックスフォード大学でそれぞれ家族帯同のもと1年間研究に従事している⁴⁾。そこで両者は子どもの第二言語発

達をつぶさに観察する機会を得た。とりわけ2020年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック下、シアトルでは一年を通してオンライン授業と家庭内学習が強いられるという特殊な事態が生じた。幼少期の子どもがこの特異な環境下でどのように英語を習得していくかを観察したことが、このトピックに対する高橋の強い関心を生むこととなった。

さて、以上のような背景のもとで開催されたこの会では、以下のトピックを中心に質疑応答がなされた。

- 第二言語「習得」の定義
- 第二言語と年齢の関係
- 第二言語と性格の関係
- 「聞き流し」の学習効果
- 第二言語習得における留学の必要性
- 第二言語習得において最も重要なこと

これらのトピックは、第二言語習得の研究領域において重要な、この領域の他の議論に発展し得るか、学生にとって身近な話題か、といった複数の観点より選定された。以下、なるべく当日の臨場感を失わないよう再現を試みたい。

3. 対談の内容

3-1. 第二言語「習得」の定義について

高橋：在外研究に備えて改めて英語を勉強し直していました。そうすると、次第に自分の英語の習熟の程度がわからなくなってくるんです。英語ができるか、と尋ねられれば全然その自信はない。じゃあまったくコミュニケーションが取れないのか、と言われるとそういうわけでもない。そのうち、そもそも第二言語を「習得」しているとはどのような状態なのだろうと疑問が大きくなってきました。若本先生の研究領域では「英語を「習得」している状態」というのは定義されていますか？

若本：第二言語を「習得」しているとはバイリンガルであることを指します。そしてバイリンガルとは2カ国語以上使えることを指しており、その言語能力の程度は特定していません。その



図1 当日の様子

意味ではここにいらっしゃるみなさんが、日本語と英語のバイリンガルであると言えると思います。第二言語習得研究者全員に聞いたわけではありませんが、ネイティブスピーカーと寸分たがわなようなバイリンガルを想定している研究者はまずいないと思います⁵⁾。むしろ、バイリンガルとは「母語に加えて」という肯定的な意味合いとして、そして習得という言葉についても「引き算」ではなくて「母語に対する」「足し算」として考えられていると思います。

高橋：とはいえ、私も含めてここにいる多くの人が「自分はバイリンガルである」とは信じられないと思うんです。今度は「じゃあ、そのバイリンガルとはどういう状態なんですか」と尋ねたくなってしまいます。

若本：重要なのはデジタル的に「白か黒」という二分法ではなくて、連続帯として考えることです。ただ、その程度を区分したいということで、例えば、CEFR（ヨーロッパ言語参照枠）では第二言語の運用区分を初級ユーザー・自立できているユーザー・エキスパートの3段階に、英検やTOEICでも同様の区分を級や得点区分によって設定しています。この表は文科省の資料から抜粋したものです（表1）。この表で「自立した言語使用者」というところまで達すれば、十分にバイリンガルと言ってよいでしょう。

3-2. 第二言語と年齢の関係について

高橋：アメリカでは子ども達に負けないように発音や聞き取りの訓練を繰り返していましたが、語彙や文法はともかく、発音や聞き取りについては残念ながらもう負けていると認めざるを得ません。子どもの第二言語習得は大人より速い、

表1 CEFRの第二言語能力記述

熟練した言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいいてい事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合っているか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

(出典) ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

とよく言われますが、それはやはり本当なのでしょうか。

若本：一見速そうに見えますが、子どもの方が速いという研究の一致は現時点では少なくともありません。例えばこの写真をご覧ください(図2)。これは22年前、私がトロントに留学をしていた頃の写真です。カナダでは校門までの送り迎えは親の義務になっていましたのでこのような写真が撮れているのですが、当時、我が家の双子は7才、日本の小学校1年生の秋～3年生の夏までの2年間、トロントのジェッシー・ケッチャムという現地校、ここは俳優のキアヌ・リーブスも卒業した小学校なのですが、公立小学校に通っていました。トロントは移民が約半数を占めていることがこの写真からも分かると思いますが、いろいろな文化的・言語的背景を持った子ども達と一緒に学ぶことができました。その際、母親と比較すると、どちらが一番英語能力が伸びたかという、半年の時点では母親の勝ちです。子ども達は、特に女の子は半年の時点ではほとんど学校では英語を話さなかったようです。違うクラスにいた男の子の方は元来社交的で友達も沢山できて英語を使いながら遊んでいました。ところが半年を過ぎてから徐々に、そしてその後は指数関数的 (exponential) に子ども達の英語能力は伸びていきました。

高橋：ということは、やはり子どもの方が…？

若本：このような話をするとそう思われるかもしれませんが、これは子どもの年齢という生物学的な要因ではなくて子どもと大人の置かれた社会的環境の差からくる違いであると考えています。つまり、子どもは朝から午後3時くらいまで学校で学んでいます。母親はトロントで英語を使う機会があっても子どもよりも量的にも質的にも圧倒的に恵まれない状況です。もし、子どもと同じような環境で大人が過ごせばどうでしょう？そう考えると第二言語習得に重要なのは年齢よりも言語環境ではないかという考えが浮かんできます。

高橋：大人と子どもの違いは年齢以外にもあって、子どもは学校なんかでの抜き差しならないコミュニケーションの場で、真剣に英語でやりとりする量が大人よりも圧倒的に多いということなんです。

若本：そうです。日本では2020年より小学校3年生からの外国語活動、5年生からの正式な科目としての英語が始まっています。文部科学省は「早くからはじめればそれで問題が解決する (the earlier, the better)」と考えている節がありますが、はっきりしていることは「早く



図2 Jesse Ketchum Junior and Senior Public School
(小学校の登校風景、トロント、2000年、若本撮影)

からはじめればそれだけでいいわけではない」ということです。例えば、中学から英語をはじめ、高校で1年間留学する方が遙に第二言語能力は伸びることは間違いのないと思います。

高橋：とはいえ、やはりある程度の年齢になると途端に習得が難しくなるということはあると思うのですが…。「臨界期」という言葉も聞いたことがあります。

若本：この臨界期仮説の信憑性は疑わしく、研究として提唱されてから50年以上経っています。未だに確認されていません⁶⁾。敏感期と言う方が正確ではないかという議論が主流です。少なくとも大学生の皆さんはこの敏感期の真ん中であると思います。つまり、日本人の英語能力が低いと言われていることのスケープゴートになってしまったのが小学校英語という印象です。

3-3. 第二言語と性格の関係について

高橋：私のところは兄妹で性格が違うのですが、その性格の違いが英語習得の度合いに関係しているのではないかと感じるがありました。第二言語習得と性格との相関についての研究は進んでいるのですか？

若本：私は外向的・内向的というパーソナリティの研究をしています。第二言語能力という点で一貫した結果はでていません。私の研究においても言語能力に統計的な有意差はでていません⁷⁾。しかし興味深いのは性格によって学習方法が異なることです。また、環境によってどちらの性格がより有利ということはあります。日本のような大クラスで一斉授業の環境下では内向的な学習者の方が有利になる可能性があります。

3-4. 「聞き流し」の学習効果について

高橋：聞く・話す能力を伸ばしたいと思ってさまざまな学習方法を調べていたところ、「大量

に英語を聞き流していると、それだけで聞き取れるようになるし、それどころか話せるようになる」という広告を見つけました。「英語は耳から」というのは本当ですか？

若本：インプット仮説を主張している研究者によると十分その根拠はあります。ただ、検証が難しいのが現状です。多くの場合、聞き流しているだけではなくて、他の学習活動もしていることが多いからです。少なくともスピード・ラーニングのような聞き流しの教材を使って「害になる」ことはありません。私の研究室では5年前に研究用に「スピード・ラーニング全48巻を一括購入」して学生の皆さんに貸し出しましたが3巻以上聞き通した学生の方はいません。つまり聞き流しが問題なのではなく、聞き流しが続かないのが最大の問題です。Krashenもインプットの量は膨大でないと効果がないと主張しています⁸⁾。

3-5. 第二言語習得における留学の必要性について

高橋：「いくら頑張っても、現地に住む経験がなければ、なかなか英語を話せるようにはならない」と言う人もいます。このような意見についてはどのようにお考えですか？

若本：ネイティブスピーカーのようになりたいと思うのであれば、留学や移住をした方が有利かもしれません。しかも長期。これは国内とはインプットやアウトプットの量が圧倒的に異なるからです。

ところが、今、世界の中でそのようなゴール設定をしている国や人は少ないと思います。日本人だけではないでしょうか？何のために英語学習をするのか？ネイティブスピーカーのようになろうとするとところがそもそもボタンの掛け違いで、掛け違えたボタンはいつまでもつじつまが合いませぬ。

例えば、日本語を母語としていない人が日本人と寸分違わない日本語を話すために日本語を

学習していると聞いたらみなさんは「そんな必要はない」と言われるのではないのでしょうか。日本語でコミュニケーションできればそれでいいとおっしゃるでしょう。英語でも同じです。英語の習得は各自の目的に応じて使えるようになることが重要です。この絵(図3)のように「留学しなければどうせ英語の習得なんて無理さ」と思って何もしないウサギのような日本人が沢山いると思います。

日本人アクセントを残しながらも自分の言いたいことを英語で伝える能力を養うことは国内で十分できることです。その意味では日本の教室内外の「温度差」が大きすぎるかもしれません。国際語としての英語は留学しなくても十分国内で育成することができます。

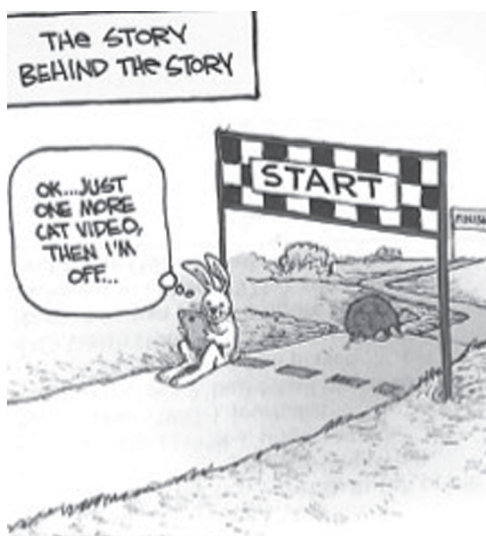


図3 ウサギとカメ

(from NON SEQUITUR, 2021.10.13)

3-6. 第二言語習得において最も重要なことについて

高橋：最後に、英語の習得においてもっとも重要なのはどんなことだとお考えですか？

若本：先ほどのカメのように着実に学び続けることです。そのためには、自分の自己効力感をあげ(維持し)、自分の学習をうまくコントロールし、自分にあった学習方法を見つけることです。そして何よりも大事なことは「くじけないこと」です。英語では Resilience (レジリエンス) と言います。言語学習では「失敗する量は学習者間で一定」だと思います。失敗を恐れるなどよく言われますが、それは言い方が間違っていて「あなたはまだ十分な失敗をしていないから上手にならないのだ」と言い直した方がいいかもしれません。膨大な数の失敗、そして失敗から立ち直る力、すなわち Resilience、これこそが英語学習において最も重要なことかもしれません。

高橋：勝手に高く設定した「習得」のハードルに怖じ気づいて、「年齢が」「性格が」「留学が」と挑戦しないことを正当化してしまう。なるほど、心当たりがあります。本当はその逆こそが習得への近道なのかもしれませんね。とても有意義なお話でした。ありがとうございました。

参考文献

- バトラ後藤裕子. (2015). 『英語学習は早いほど良いのか』. 岩波書店.
- 文部科学省. (2018). 「各資格・検定試験と CEFR との対照表」.
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf
- Krashen, S. D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. Longman.
- Lightbown, P. M., & Spada, N. (2021). *How languages are learned* (Fifth ed.). Oxford University Press.
- Miller, W. (2021). *Non Sequitur 2022* Andrews McMeel Publishing.
- Wakamoto, N. (2009). *Extroversion/introversion in foreign language learning: Interactions with learner strategy use*. Peter Lang.

注

- 1) 第1回目は「谷崎源氏許されざる〈表象〉なぜどんな点が、誰の手によって」(11月4日、大津直子准教授)、第2回目は「シェイクスピアをどう演じるか「夏の夜の夢」のボトムとティターニアの関係性について」(11月26日、辻英子准教授)、第3回目は「お雑煮の日本語学」(12月16日、中井精一教授)として開催。
- 2) 第4回目「英語学習ホントのところ 若本先生に聞きたいこと」と題して開催。
- 3) 英語英文学科学生は日本語教育副専攻、日本語日本文学科学生は英語教育を副専攻として履修することが出来る。海外の大学によく見られるマイナー制度である。
- 4) 若本の2018年度の在外研究では子どもは既に成人していたため配偶者のみの帯同であった。
- 5) バイリンガルの言語能力をモノリンガルの言語能力指標で測ることをモノリンガル・バイアスとして批判する動きがある(バトラー後藤裕子、2015)
- 6) 例えば、Lightbown and Spada (2021).
- 7) 例えば、Wakamoto (2009).
- 8) 例えば、Krashen (1985).